

す。

百瀬 浩子 議員

質問 トータルサポートセンターについて

(内容) トータルサポートセンターが設置されている場所が「和紙の里」の一角ということから、観光等で村を訪れた方に対してさまざまな情報を提供することなど案内業務を提供することと生じる「交流の輪を広げる」といったイメージが浮かびますが、総合戦略に組み込まれた事業として物足りなさを感じます。この新設事業に対して500万円の予算がほぼ人件費であり、村益と予算のバランスが適正かどうか検討の必要があると考えます。

①「トータルサポートセンター」新設にいたる経緯と運営概要について

答弁 東秩父村では、和紙の里ハブ化構想に基づき和紙の里を地域公共交通の拠点として整備することとし、バスターミナル、農産物直売所等の整備を行いました。この整備に伴い東秩父村を訪れる方は、一旦和紙の里に来ていただき、そこで村内の情報を得て、目的の場所へ向かってもらうという、人の流れを作ることを目指し、村内の情報を得る場所として、また、行政サ

ービスの提供を含め総合的に案内する場所という意味も込めて「トータルサポートセンター」を設置しました。

運営概要は、職員1名が常駐し、4時間の交代勤務制で対応しており、現在、臨時職員3名が当たっております。また、地域おこし協力隊員も時間は定めていませんが、駐在しており、土日には、おもてなし観光案内員を配置し、観光客の要望に対応しております。業務内容は、東秩父村を中心とした村内外の観光情報等の案内、モニターによる観光映像の放映、防犯カメラの管理、交通情報の提供、電話対応、来場者数の集計、音声通訳タブレットによる外国人観光客への対応、掲示物および落とし物への対応、クレーム対応、災害時の情報対応などです。

②広報誌の平成29年度の主要事業(抜粋)になぜ紹介されなかったのか

答弁 2017年4月号の広報誌7Pに記載いたしました、「平成29年度の主要事業(抜粋)」につきましても、掲載スペースに限りがございます。そのため、金額または内容を考慮し、村民の皆さまに関わりが深い事業を選択したためです。

質問 「青い目の人形」をテ

マにした交流について

(内容) 文化交流事業を展開にするにあたり、本村には「青い目の人形」という素晴らしい宝があります。この人形を交流事業のテーマにすることで連携を図れる自治体は本村を含め5市5町1村になります。そのうち和光市、小川町、寄居町と本村では平成29年1月19日に埼玉県知事立会いのもと「相互交流に関する共同宣言」が交わされています。

①共同宣言後の具体的交流について

答弁 和光市学校長会議へ小川町・寄居町および東秩父村の2町1村が、今年度予定している和光市の小学校教諭を対象とした2町1村の社会科見学モニターツアーについて話し合いが持たれました。和光市内小学校9校の教諭を対象に、東秩父村和紙の里、小川町の酒蔵・埼玉伝統工芸会館、寄居町の鉢形城歴史館の視察を予定しています。このツアーにより今後、和光市内小学生の児童たちに当地域を知ってもらい、埼玉県に愛着を持ち、県内の良さに気付いてもらう期待があります。また、和光市からは、和光市と姉妹都市提携を結んでいるアメリカ合衆国ワシントン州のロングビュー

市民と和光市民を合わせた方々の2町1村をめぐる市民ツアーを10月に予定しており、イベント参加の提案があり現在調整中です。

②「青い目の人形」の概要と歴史資料的価値から学校や地域の中でどのような「学びの循環」が持てるか

答弁 今から90年前、昭和2年(1927年)「世界の平和は子どもから」というスローガンのもと、1万2739体の人形がアメリカ合衆国の子どもたちから日本に贈られました。日本では「友情人形」と訳され当時、野口雨情作詞の『青い眼の人形』の歌が広く流行していたため、

一般に「友情人形」が「青い目の人形」と呼ばれるようになりました。当時の両国は経済不況が深まり暗い世相であり、日米関係は悪化していました。この危機を両国民の相互理解で好転しようとしてシドニー・ルイス・ギューリック博士が中心となり、「世界児童親善会」を設立し、日本の子どもたちに人形を贈ろうという運動が展開されました。本村には、ニューヨークのグリーン生まれのマーガレット・フォックスが大河原尋常高等小学校(現 槻川小学校)に贈られました。日本とアメリカ合衆国はこ

うした人形を通じての文化交流があったにもかかわらず、不幸な戦時下に入り人形受難の時代になりました。戦後、忘れ去られていた人形たちは、昭和48年ごろから各地で健在であることがわかりました。全国に贈られた「青い目の人形」1万2739体のうち健在なのは216体といわれ、埼玉県では12体が確認されています。本村のマーガレット・フォックスは、不幸な戦時下においても大切に保管されてきました。現在は、和紙の里ふるさと文化伝習館に展示されており、静かに平和の大切さを語りかけています。

「学びの循環」とは、学んだ成果を自分以外の人々や団体のために活用し、各世代の交流やつながりを深めるとともに、誰もが生き生きと活動できる社会の構築や地域の活性化にも寄与するという考え方とあります。

本小学校では、始業時間前の8時15分から15分程度の時間に「ふるさと講話」を実施してきました。この講話は、ふるさと東秩父村の良さや歴史を知ることにより、地域や学校を愛し、誇りに思える児童の育成を図ることを目的に実施しています。主に地域住民が講師となり、年度により内容は違いますが和紙、